

サクラと病気



写真1 幼果菌核病の激害を受ける^{つばきかんぼくろ}「椿寒桜」の葉（葉の病徴が目立つ栽培品種）

関西支所 主任研究員 長谷川 絵里

現在、日本ではサクラ類を寄主とする約60の病原が記載されています。その中からサクラの種・品種との関連が興味深い2種類の病害をご紹介します。

サクラ類幼果菌核病（写真1）は、子のう菌^{（子）}のモニリニア属の一種により起こる病害です。この菌が花に感染すると未成熟のまま褐変した罹病果^{（罹）}を形成し、病原菌は地上に落ちた罹病果で越冬します。そして、翌年春先のサクラ開花期に、ミイラのようにしなびた罹病果上に子のう盤が形成され、そこから子のう胞子が飛散して、1次感染源となります。子のう胞子に感染した葉と幼梢^{（幼）}は枯れて褐変し垂れ下がり、褐変部に分生子^{（分）}が形成されて飛散し、2次感染源となります。サクラ栽培品種の中には、葉の病徴が目立つタイプと、葉にはほとんど病徴が表れないで、幼果が罹病するだけのタイプがあります（写真1、2）。幼果が罹病しても樹勢にはほとんど影響がありませんが、葉が激しく害される年が続くと樹勢が衰え、枯死することもある

ります。カラミザクラ・カンヒザクラ・マメザクラの系統には葉が罹病するものが多く、果実が罹病する系統のサクラなどから飛来する子のう胞子の感染を毎年受けると、衰弱することになりかねません。

サクラ類でんぐ巢病(写真3)は、異常に多く分枝したほうき状の罹病枝が生じる病気です。罹病枝は正常枝に比べて花をあまり着けず、正常枝の葉より早い時期に小型の葉を着けます。罹

病枝の葉は晩春には黒く萎れ、葉裏に病原菌である子のう菌のタフリナ属の一種の子実層を形成し、子実層から子のう胞子が飛散して感染します。ほうき状の異常な分枝は、この菌が産生する植物ホルモンによると考えられています。公園などの自然感染木の調査では、



写真2 幼果菌核病に罹病した『^{するがだいに}駿河台匂』の幼果(葉の病徴が目立たない栽培品種)

オオシマザクラとエドヒガンの雑種である『染井吉野』の罹病率が著しく高かったのですが、野生種のオオシマザクラやエドヒガンにはてんぐ巢病の罹病枝を持つ個体は見つかりませんでした。このことから、本病に罹りにくい親から病気に罹りやすい栽培品種が生じたこととなります。てんぐ巢病に罹りやすい個体と罹りにくい個体がオオシマザクラと

エドヒガンの種内に混在しており、罹りやすい性質を持った個体がたまたま『染井吉野』の作出に関係したのでしょうか、興味深い現象です。

(注1) 子のう菌 カビ・キノコの一群で、子のうと呼ばれる小さな袋の中に、減数分裂によって胞子(子のう胞子)を作る。

(注2) 分生子 減数分裂によらずに無性的に作られる胞子。



写真3 『染井吉野』に集団発生したてんぐ巢病(矢印は罹病枝)